



県道からの入口の看板

湿原展望所からの晩秋の眺め。鮮やかな紅葉は少ないが、コナラやシロモジなど多様な黄葉が楽しめる



4万年の歴史をもつ湿原と森を守る

滋賀県の最北端に位置する「山門水源の森」は、日本海と琵琶湖に挟まれた環境から、冷温帯性のブナやミズナラ、暖温帯性のアカガシなどの多様な植物が共生する貴重な森だ。

「山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会」（滋賀県長浜市）は、森や湿原の保全と管理、調査研究に取り組むグループだ。1991年、山門水源の森一帯がゴルフ場になる計画が起った際、有志による「山門湿原研究グループ」が計画に反対し、県や地元自治体に山門湿原の重要性と保全を訴えたのが始まりだった。

「開発ブームだった当時は、ゴルフ場計画に賛成する人が多かったそうです。研究グループは5年がかりで報告書をまとめ、湿原の重要性を学術的に明らかにしました。そして、バブル崩壊でゴルフ場計画がなくなり、県が水源の森を保安林として公有化しました。

研究グループが中心になって『山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会』を2001年に設立し、湿原と森の保全管理を担うことになりました」と、会の理事を務める富岡明さんは説明する。発足以降、会のメンバーは、自然観察会や調査研究、パトロールや植生復

元作業などを重ねてきた。森の中央に広がる山門湿原は、約4万年前の氷河期に誕生したとされる約3haの高層湿原で、その時代の生き残りといわれるミツガシワや、サギソウなどの希少種が生育している。ハッチョウトンボやモリアオガエルなどの動物も生息し、

湿原と周辺624haは、1995年に「上の庄の森」として林野庁の「水源の森」百選に選ばれ、近年は年間4000人が自然散策で訪れる。

発足当初、自然観察会を活動の柱にしていた会だったが、近年は保全活動が主という。とくに最近、深刻化しているのが、獣害による環境の変化だ。会では2000年代初頭、自然観察コースを塞ぐササの刈り取りに苦心していたが、今年からは逆に保全に取り組むようになった。シカの食害でササ原が枯れてゆくのだ。枯死の範囲はここ数年で急激に拡大した。ササ原はブナ林の下層植生で、その急激な衰退は森の生態系にも大きな影響を与えることが危惧されている。

そこで会では、ササをネットで保護するなどの、保全活動に取り組んでいる。ツノ研ぎや食害で樹皮が傷つくと木が枯死するため、荷造りテープを幹の観察ポイントを教えるのと、満面の笑顔を見せて探検を始めるそうだ。

「子供の頃に自然の中で遊んだ経験は、大人になって必ず生きてくると思います。ふだんの生活から離れた場所ですが、森と湿原の変化が日常生活と無関係でないことを知ってもらいたい。食害で森が衰退すると、土壌が弱って自然災害が起こりやすくなります。人と山のつながりを訴えていきたいですね。森は歩くだけで気持ちがいいですし、親しむうちに知識や経験が深くなる。私も樹種を知り、以前は緑一色のイメージしかなかった森の、さまざまな色を見分けるようになりました。森に通うと愛着がわき、活動に取り組み情熱の源になります」(富岡さん)

2010年、シカに食べられてミツガシワが壊滅状態になったが、保全活動が実り、今年再生する姿が見られた。防獣ネットを設置した場所では、トキソウやサギソウも増えてきた。次の世代に引き継ぐために、メンバーは日々、保全活動に取り組んでいる。

植林ヒノキにテープを巻く中学生たち。シカの食害や、繁殖期のオスジカがツノを研いで皮を剥ぐなどの被害を防止できる



シカの個体数管理への第一歩として、頭数密度を調べるための糞粒調査をおこなう



湿原の重要箇所を防獣ネット（シカ用）とトタン（イノシシ用）で囲う。車両が通れる道はなく、資材の運搬はすべて人力による



毎年、林床整備、土のう運搬、食害テープ巻き、ササユリの金網片付けなど、様々な保全活動に来てくれる地元の西浅井中学校の生徒ら



砂が湿原に流入しないように湿原手前に沈砂池を作って砂を溜めている。満杯になると、砂を土のう袋に詰めて沢の補強や堰堤づくりなどに利用する

ミツガシワが咲き誇っていた南部湿原（1999年5月）。2010年には食害の影響で1株も開花が見られなくなった。復活は悲願だ



防獣ネットで守られているササユリ。種を採取したあと、地元の中学生やボランティアによって播種作業がおこなわれる。花が咲くのは播種の7年後



ハッチョウトンボのメス。森には約40種のトンボが生息する

森の入口に設けられている付属湿地(ピオトープ)の管理作業。実際の湿原は盗掘防止などで立ち入り禁止にしているため、ここで湿原の植物の増殖を図っている



セブン-イレブン 記念財団が 支援しています